

● 関西大学人権問題研究室 ●

# 第52回 公開講座

## 「ベール」の下の素顔

女性の何を「隠させる」のか、女性のなにを「あばきだす」のか

日時 2007年11月16日（金）13：00～14：30

場所 千里山キャンパス 尚文館 1階 マルチメディアAV大教室

講師 かなたに ち え こ 金谷 千慧子（委嘱研究員・非常勤講師）

最近『キリストの棺—世界を震撼させた新発見の全貌』が出版された。マグダラ（地域名）のマリアがイエスキリストの妻であったことを推測させる『ダビンチ・コード』の続編ともいえる。定説によると「マグダラのマリアは娼婦だった」。しかし聖書では彼女が娼婦であるという直接の記述はない。それにも関わらず、2000年に及ぶキリスト教の闇の歴史の中で、マグダラのマリアは悔い改めた娼婦とされ、キリスト教では女性は聖母と悪女（娼婦・魔女）としてしか存在せず、「マリア」は聖女として、「マグダラのマリア」は悪女に仕立て上げられていった。中世以降、異端を魔女として抹殺するという歴史が加わる。宗教画における聖女と悪女の描かれ方は、聖女、聖母マリアは頭の髪を隠し、かぶり物を付けているのに対し、悪女マグダラのマリアは、裸にされ、長い髪を官能を表現する手法として、ぐねぐねと蛇をイメージさせながら、描かれている。

一方、イスラム教の場合はどうか。コーランに従えば、女性は親族以外の男性にその「美」を見せてはならないとされる。ベールは男女を隔てるカーテンであり、女性性を隠すものである。イスラム教徒の女性として規範をまもり、男性を誘惑しないということをあらわすものである。女性は家の外では自分の魅力（性的）を人に見せてはならない。そのための最善の方法は、女性は私的空間（家庭）の外に出ないことである。しかし、やむなく公的空間に出るときには、その「美」を隠すためにベールを被らねばならない。

「かくす」「へだてる」を意味するアラビア語の動詞（hajaba）からの派生語で、ヘジャーブとも発音される。ベール着用は地域によって異なる。サウジアラビア、イランのように着用が義務づけられている国もあれば、アフガニスタンのように義務ではないが例外なく女性が着用している国もある。また、エジプト、トルコ、インドネシアなどでは個人の選択にまかされている。被り方も、髪だけを被うもの、顔を全部被うもの、さらに足首まで被うものと多様である。

21世紀になっても未だに女性に参政権を認めていない国があり、その多くは女性たちがベールで身を隠している（義務づけられている）イスラム教のアラブ系社会である。

\* \* \*

●聴講無料 予約は不要です。多数のご来場を歓迎します。  
手話通訳が必要な場合は、11月8日（木）までに人権問題研究室へご連絡ください。

主催 関西大学人権問題研究室

〒564-8680

吹田市山手町3-35 阪急千里線「関大前」駅下車

Tel 06-6368-1182 Fax 06-6368-0081

ホームページ <http://www.kansai-u.ac.jp/hrs>